

## 早稲田大学 国際教養学部 世界史 講評

### 〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	60分
特徴・その他	昨年度の大問5が本年度は大問4の構成となり、05年度の構成に戻った。問題数はやや減少。全体の難易度はかわらないが、簡単な問題が目立つ一方、難問も目立ち、構成は二極化の様相を呈している。

### 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	イスラーム世界の諸建築	基本的な知識を問う問題が大半で、今年の大問4問のなかでは最も得点しやすい。しかし、インド関係をしっかりやっていた受験生には案外難しかったかも知れない。	標準
II	中世の西欧とビザンツ帝国	全て基本的な知識を問うもので、正誤判定もわずらわしいところがない。今年の大問4問の中では最も得点しやすい。問8・問9と連続して第4回十字軍を問うなど、問題構成に荒さが感じられる。	易
III	19～20世紀の民族運動・移民・女性・マイノリティーの権利	問4の米の移民問題は(1)の中国系、(2)の日系ともに難問。とくに正しい文の内容は普通の受験生にとっては初めて聞く話ばかりのはずである。問6の従軍慰安婦問題は、こうした事項に個人的関心を持っている向きには別段難しくないだろうが、普通の受験勉強では対処不可能とっていい。	やや難
IV	ロシア・ソ連近現代史	問1の年代配列は1990から91年が対象で、しかもワルシャワ条約機構解体(91.7)から保守派クーデタ(91.8)、バルト3国独立(91.9)と月単位の前後関係を問う。問8も4つの事象が全て1989年という問題だが、ホネカー退陣とベルリンの壁開放の前後さえわかれば正解できる。問6のゴルバチョフの前任者チェルネンコを問うのもいやらしい。問10のサミット提唱者は仏大統領ジスカールデスタンだが、目立たない政治家なので心当たりのある人はほとんどいなかったろう。	標準 (一部難)

[総合コメント]

全体に点の取りやすい問題と取りにくい問題に二極化している。出だしの大問1は取り付きやすいので、「これはいける」「やさしいぞ」という印象をもった人も多いだろう。しかし、大問2を経て大問3、4と進むにつれて厄介な正誤判定が次々と出てくるので、後半はかなり深刻になって当然である。ややこしい場所をつまずいていると、時間はどんどん過ぎてしまうので、時間不足に陥った人も多いと思われる。自分にとって手も足もでない問題にのめりこむのは得策でない。時間をかければ(丹念に消去法で正解にたどりつくなど)「行けそう」か、否か、迅速な判断が求められる。近現代史、とくに現代史に難問が目立つので、古代・中世では上位層と中堅層に差が出なかったろう。差がついたのは現代史の正誤判定と年代配列問題である。この傾向が続くと仮定すると、20世紀、とくに戦後史は入念な学習と細心の注意が求められる。また、スポットで問われる日本関係の出題も要注意である。念のために、山川『詳説日本史B』の明治以降の対外関係関連の本文を通読しておくのが望ましい。